

3) 修理・復元事業

幸喜 淳¹・宮城奈々¹・鶴田 大¹・中野稚里¹・高嶺瑞貴¹

キーワード：毛長禧 花鳥図 色材科学調査 カラーフィル 漆塗膜 麦漆 膠液 尚育王 首里八景詩 紹織染分地 黒朝衣 ベルリン国立民族学博物館 球陽 ムルドゥッチリ ウコン染め

1. はじめに

本事業は、首里城基金を活用し、当財団が主導して実施する修理・復元事業である。首里城公園の再建に伴い、火災によって被災した漆工品、陶磁器、書跡、染織作品の修理および復元製作を行うものである。

これにより、企画展示や常設展示において首里城の歴史的・文化的価値を継承し、広く活用することを目指す。また、被災文化財の芸術的・歴史的価値を適切に保存・復元することで、伝統技術の継承と後世への伝達に寄与する。

本事業を通じて、首里城の復興と文化財保護の意義を広く発信するとともに、持続可能な文化財管理の基盤構築を目指す。

2. 修理

1) 絵画分野の報告（主担当：幸喜、鶴田）

本事業は当財団所蔵の毛長禧筆『花鳥図(鷹雀枯木芙蓉図)』の修理業務であり、一対とされる毛長禧筆『花鳥図(牡丹尾長鳥図)』(令和5年度修理)と共に料紙・色材の分析調査も実施した。

毛長禧(佐渡山安健 1806-1865)は首里王府の代表的な絵師で、尚育王御後絵制作でも知られる。今回の修理は、昨年度修理の毛長禧筆『花鳥図(牡丹尾長鳥図)』(元一揃)に続くもので昨年度同様の指針で解体修理を実施した。

2点について実施した色材調査では無機色材(花等の中心モチーフ)と有機色材(葉・岩等の周辺のモチーフ)の混用など琉球絵画通有の特色が確認できた。色材調査および筆致の詳細な検討によって、これら2作品が同時期に毛長禧によって描かれた一揃の作品群であることがほぼ確認された。ただし、2作品を一対の作品(対幅)と考えるには課題が二つある。一つは本紙(料紙)の違いである。「牡丹尾長鳥図」の本紙が宣紙(青檀+蘆)であり、「鷹雀枯木芙蓉図」が竹紙であることである。紙の専門家である表具師らも、本紙の材料調査以前は全く同じ素材と考えていたように、非常に近い紙質である。しかし解体修理によって得られた情報や色材・画風などからも2作品は一揃いと考えられるため、書画の本紙を清代中国などから入手していた琉球王国にあつては、異なる素材であっても質感が非常に近い紙は一揃いの作品に用いてい

たとめるのが妥当と考えられる。この点は類例資料の調査を含め、今後の課題となる。2作品を一対(対幅)と考える際に問題となるもう一つの点は、2作品を並置した際に、存在感のアンバランス(=華麗で目を引く「牡丹尾長鳥図」の存在感の大きさと、地味で冷えさびた「鷹雀枯木芙蓉図」の存在感の薄さ)が感じられることである。この点については以前から課題となっていたが、表装を整えた今回、あらためて課題となった。これについて議論・検討を進めた結果、この2作品は、元は春夏秋冬の四幅対であり、夏の牡丹、秋の芙蓉に、冬と春を加えて作品群として調和していたのではないかと推論に達した。琉球絵画や文献資料および、毛長禧が制作の際に参考にしたであろう福建派などの作品群の調査を通して、2作品の制作当初の様子をあらためて考えてみたい。可能性等の検討課題も見出された(写真-1)。



写真-1 毛長禧作品2点を検討した（京都・墨仙堂）

2) 陶磁器分野の報告（主担当：鶴田）

一昨年度以降、手掛けてきた被災陶磁器5件〔①水盤、②多聞天立像、③焼締四耳壺、④白水盆、⑤琉球色々盃(8点)〕の修理のうち、最後の1点となる大型の水盤修理を実施した。

水盤については、当初は他資料同様に県外の工房での修理作業を考えたが、30kgを超える重量を考えると、被災により脆弱化している陶器が空輸により破損するリスクが懸念された。このため県外工房の作業(昨年度)では微細な破片を10点の破片にまとめるまでに留めた。今年度はこれら10点の破片を慎重に空輸し、沖縄県内でそれらの接合+仕上げの作業をおこなった。

修理方法は一般に知られる金継技法でなく、近代以降に英国で発達した文化財としての陶磁器修理の技法であるカラーフィル技法による。修理はカラーフィル技法の第一人者である佐野智恵子氏

¹ 琉球文化財研究室

(工房いにしへ)が行った(写真-2)。カラーフィル技法の利点として①欠損部分の接合面の調整(削り)を最小限にできる。②金継ぎ技法と異なり接合部位が目立たず、自然な色合わせができる。③エポキシ樹脂による接合の為、溶剤による分離が容易であり、数十年毎の経年修理の際に資料本体へのダメージが少ない。などが挙げられ、今後の文化財としての陶磁器修理の主流になると考えられる。

なお、水盤の修理に併せて移動用の台座・箱を誂えた。これは被災資料・脆弱資料の保管・移動・展示の方法を総合的に考えたもので、今後、水盤は移動用の台座・箱に保管し、展示の際には台座ごと設置をおこなうこととなる。

脆弱化した被災陶磁器資料については、通常と異なる保管方法(収納箱の工夫)、展示方法(誂えの収納箱を活用した展示、支柱などを用いた展示など)を検討すべきであり、今後1点1点について個別に考えていくことになる。

次年度は、これまで修理作業を完了した陶磁器類の収納箱(保管・移動・展示を考慮した桐箱)の製作業務となる。



写真-2 カラーフィル作業：修繕品の本体をエポキシ樹脂で接合し、透明の色材を含む基本の色材で色合い・質感の樹脂を、接合部分に最小限で添付をおこなう。最終の接合・仕上げ作業は台座上でおこなった。

3) 漆器分野の報告(主担当：中野、高嶺)

火災の影響を受けた漆器の修理については、これまで漆工品の修理実績がある室瀬和美氏監修のもと松本達弥氏を技術指導として業務委託し、東京文化財研究所には科学的な見地から助言を頂きながら琉球漆工藝舎と株式会社目白漆芸文化財研究所(以下「目白漆芸文化財研究所」という)のそれぞれの技術者と連携し多角的に修理に取り組んでいる。

(1) 琉球漆工藝舎による修理

琉球漆工藝舎には4件の修理業務を委託した。資料全般の修理においては、クリーニング、接着、損傷部の補填、漆塗膜の補強を行なった。今年度からは沖縄県指定文化財である『黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠』の修理に取り掛かった。修理期間は3年間と見込まれている。火災の影響により特に食籠の上段の塗膜剥離が著しく、亀裂が細かく入った状態であり、高度な塗膜押さえの技術が必要と

される。塗膜押さえには、生漆と水練りした小麦粉を混ぜ合わせた麦漆を溶剤で希釈し、塗膜下に流し込みながら接着する方法を用いるが、細かな塗膜を接着するために数cmの範囲で押さえる行程を繰り返すことにした。塗膜を圧着する程度は塗膜の硬さによって金属製のクランプや木製の特製クランプを使うなど道具を変えながら接着作業を行った。麦漆で押さえる作業を行った部分は、塗膜表面に余分な漆が残らないように小さな塗膜片一つ一つを拭き取る作業を行わなければならない。特に沈金の彫りが入っている部分に漆が残らないように細心の注意を払いながら処置した。次年度も引き続き上段の塗膜押さえと蓋と下段の処置も行う予定である。



写真-3 塗膜押さえる様子

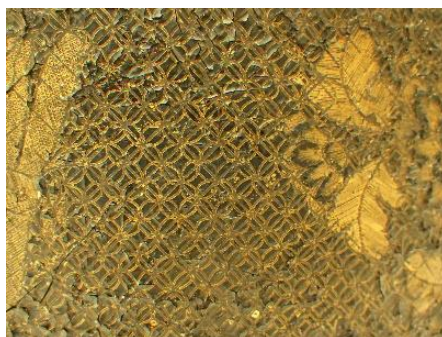


写真-4 細かな亀裂が生じている塗膜



写真-5 進捗確認風景

(2) 目白漆芸文化財研究所による修理

目白漆芸文化財研究所には8件の修理業務を委託した。うち今年度修理完了5件、次年度継続3件である。資料全般の修理においては、クリーニング、接着、損傷部の補填、漆塗膜の補強を行った。そのうち『黒漆牡丹七宝繫沈金蓋台』の修理では、経年

による汚れの付着、漆塗膜の劣化により亀裂、剥離や欠失している箇所に対しての処置を行った。高台の畳付部分には塗膜及び下地が欠損し、布着せ層が露出していた。クリーニングでは埃を除去し、精製水を含ませた木綿布や綿棒で塗膜表面の汚れを取り除いた。また、鏝裏に付着していた過去の修理などで付着したと考えられる樹脂を発見したため、篋等を用いてオリジナルの塗膜を傷めないよう留意し物理的に除去を行った。クリーニング後は火災の影響で柔軟性が失われ剥離した塗膜に膠液と溶剤で希釈した麦漆を含浸させ押さえを行った。畳付の欠損部は布着せの繊維が見えている状態であった。将来的に構造調査が必要となった場合に往時の材料や構造がわかる情報を残しておくため畳付の欠損部は形状を復さず、現状のまま維持できるように膠液による安定化処置を施すことにした。触手による塗膜の剥落を防ぐため亀裂や損傷箇所には下地と錆付けを行い、錆漆が乾固した後、仕上げに漆固めを行った。



写真-6 No. 502 黒漆牡丹七宝繫沈金蓋台 修理後



写真-7 各修理技術者と技術指導者による完了検査

3. 復元

1) 書跡分野の報告（主担当：鶴田）

焼失した尚育王自筆『首里八景詩』の復元試作を実施した。令和4年度以降の一連の尚育王書跡(焼失)の復元業務に連なるもので、これまでの類例作品調査・復元作業の成果を元に、原本が、①琉球の代表的な書家である鄭嘉訓・鄭元偉の書風を習った尚育王が独自の書風を確立した作品とみられること、②首里八景の全部(八景)を漢詩に詠じた唯一の文学作品であることが確認された。



写真-8 原本の原寸コピーを用いつつ、伝統的な臨書・敷写し技法で模写を繰り返す

復元試作では前回同様、筆墨硯紙を周到に選び、伝統的な臨書・敷写し併用技法により造形と筆勢の精確な模写に努めた。原本に倣って、一連の時間の途中で墨色の継続性を維持しつつ揮毫を進めるのは非常に困難である。揮毫の繰り返しにより全280文字の造形・筆致を体得しつつ試作を仕上げるのができた。(写真-8)

次年度は印章模刻を含め、本紙全体(八枚)の揮毫の本製作をおこなう。

2) 染織分野の報告（主担当：宮城）

今年度は、復元製作2件、原資料調査3回、ワーキング会議1回、次年度の復元製作開始に向けた打ち合わせを実施した。

(1) 復元製作

ア) 「絢織染分地鶴に松梅菊両面紅型銅衣」

内容：試作および原資料との確認調査(2回)
製作者：古紅型研究会 群星(代表 渡名喜はるみ氏)

期間：令和6年4月23日～2025年2月28日

成果品：試作品、型紙、月報、報告書

イ) 「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型袷衣裳」

内容：原資料調査および白地飛紗綾絹布試作
製作者：株式会社龍村美術織物

期間：令和6年11月6日～2025年2月28日

成果品：試作品、紋紙データ、報告書

(2) 原資料調査・ワーキング会議（写真-9, 10）

ア) 「紬黄色地ムルドゥッチリ袷衣裳（琉装）」

日程：令和6年5月30日10:00～11:30

場所：沖縄県立博物館・美術館 博物館班

参加者：菊池理予氏（東京文化財研究所）

宮良みゆき氏（久米島博物館）

宮城・中野・嘉手苺（琉文研）

比嘉（首里城事業課）

復元製作の意義：

この復元製作を通じ、琉球王国時代の染織技術の解明と継承を目的とする。特に、染色技法・糸の選定・織機の活用という3つの側面から科学的調査と技術的検証を行い、その技術と知見を次世代へ継承することを目指す。

①素材と糸の選定

- ・繭の種類（黄繭または白繭）による発色や強度の違いを試験し、適切な素材を決定。
- ・糸の堅牢度・引っ張り強度試験を実施し、実用的な耐久性を検証。
- ・養蚕方法の選定（回転まぶし・藁まぶし）により、繭の品質と糸量の安定供給を検討。
- ・糸の精練方法（木灰の使用・酵素成練の可能性）を調査し、伝統技法の再現を図る。

②染色技法の検証

- ・ウコン染め（生ウコン・乾燥ウコンの比較）の色調変化を試験し、媒染の影響を分析。
- ・裏地の染色（ベニバナ・キハダの重ね染め）を実施し、古典技法の再現を検討。
- ・緋の染色（蘇芳、ウコン下地の藍重ね染め、五倍子の黒染め・鉄媒染（写真-11））について、文献調査と科学分析を実施。

③織機の活用と技術継承

- ・久米島の保存団体へ地機による製作を依頼し、伝統的な製織技術を活用。
- ・地機の研修（南風原および久米島での実施）を通じ、技術継承を推進。
- ・織機の製作（南風原・大城義政氏が製作可能）により、継続的な製作環境を整備。



写真-9 原資料調査の様子



写真-10 ワーキング会議の様子

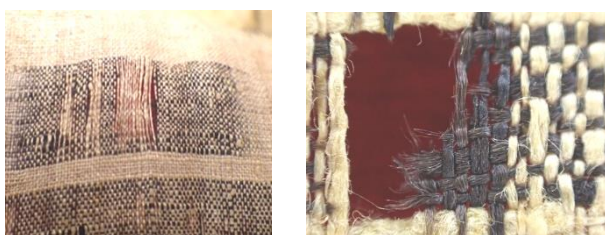


写真-11 原資料の黒緋（鉄媒染）の糸切れ

イ)「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型袷衣裳」

日程：令和6年6月11日 13:30～17:30

調査：沖縄県立博物館・美術館（写真-12）

会議：那覇事務所2階会議室（写真-13）

参加者：生田ゆき氏・高木香奈子氏（文化庁）

渡名喜はるみ氏（古紅型研究会 群星）

名護朝和（沖縄県立芸術大学）

宮城・中野・嘉手苺（琉文研）

比嘉（首里城事業課）

復元製作の意義：

「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型衣裳」は、首里城火災により被災し、展示や保存が困難な状態にある。復元製作を通じて、文化財の価値を後世へ継承することを目指す。

①原資料目視調査および科学調査を基にした技術再現

- ・調査（顕微鏡分析・媒染の影響分析）の結果を基に材料の選定と技法の解明を行う。

②生地再現

- ・原資料の表地（写真-14, 15）と裏地（写真-16, 17）の織密度や織組織（紗綾）、文様を分析し、原資料に近い布地の復元を目指す。

③素材の選定

- ・原資料に近い絹糸を使用

④染色技法の解明

- ・ウコン染めの浸染・引き染めの違いを科学的に検証
- ・石黄や水銀朱など、伝統的な色材の安全な代替手法を模索

⑤型紙の復元

- ・伊勢型紙の技術との関係性を調査し、琉球紅型特有の技法を分析
- ・糸掛け技法の再現と型紙の精度向上



写真-12 原資料調査の様子



写真-13 ワーキング会議の様子



写真-14 表地の文様



写真-15 文様部分の拡大



写真-19 黒朝衣の拡大

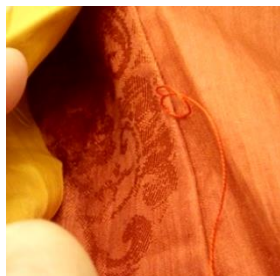


写真-16 裏地の文様



写真-17 文様部分の拡大

ウ)「黒朝衣」

日程：令和6年11月21日13:30～16:30

場所：那覇事務所2階会議室（写真-18）

参加者：早川典子氏・菊池理予氏（東京文化財研究所）

大城あや氏（芭蕉布工房うるく）

宮城・中野・嘉手苅（琉文研）

復元製作と科学調査の意義：

黒朝衣は経年劣化が著しく、展示や取り扱いが困難な状態にある（写真-19）。類似資料が那覇市歴史博物館、沖縄県立博物館・美術館、ベルリン国立民族学博物館にも所蔵されており、歴史書『球陽』にも記載されているように、近世琉球の階位制度において着用された衣装としての重要な関連性を持つ。しかし、これまで黒朝衣や類似資料に対する色材・繊維の科学調査は十分に実施されておらず、製作技法や材料の科学的情報が不十分である。今回の復元製作では、科学調査を実施し、その結果に基づいて材料を選定し、特に往時の染色技法の解明を目指すことで、琉球王国時代の染織資料研究の一助とする。



写真-18 原資料調査の様子

(3) 次年度復元製作開始に関する打ち合わせ

ア)「絨黄色地ムルドゥッチリ袷衣裳（琉装）」

- ・ 復元製作仕様書（案）を作成し、久米島博物館学芸員 宮良みゆき氏を通じて内容の確認および調整を実施。
- ・ 久米島にて、宮良みゆき氏および製作予定者 桃原禎子氏と打ち合わせを実施。
- ・ 次年度の見積作成を依頼。

イ)「絹黄色地梅楓桜雪輪手鞠文様紅型袷衣裳」

- ・ 復元製作仕様書（案）を作成し、製作予定者 名護朝和氏（沖縄県立芸術大学 教授）と内容の確認および調整を実施。
- ・ 次年度の見積作成を依頼。
- ・ 沖縄県立芸術大学事務局（契約担当者）および名護氏と、次年度契約に関する打ち合わせを対面1回、メール3回で実施。

エ)「黒朝衣」

- ・ 復元製作仕様書（案）を作成し、製作予定者 大城あや氏（芭蕉布工房うるく）と工程の確認および調整を実施。
- ・ 次年度の見積作成を依頼。

4. 外部評価委員コメント

類例品の僅少な琉球絵画を修理作業のタイミングで分析調査を実施し、新たな知見を公開した研究活動は評価されるものである。絵画は首里城内の設えと密接に関わることから、継続的な研究が望まれる。

また、類例のない火災被災資料の修理・復元は、技術や予算の面で困難を伴う事業であるが、文化遺産の継承において最も重要かつ優先すべき取組であり、科学分析に基づく復元の意義は極めて大きい。

作業工程および予算執行についても、概ね順当に実施されていると評価できる。

（宮里顧問：浦添市美術館前館長）